

〈書評〉 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター、宇田川勝編 『ケース・スタディー 日本の企業家群像』 文真堂、2008年3月

長田, 貴仁

---

(出版者 / Publisher)

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

イノベーション・マネジメント / イノベーション・マネジメント

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

185

(終了ページ / End Page)

189

(発行年 / Year)

2009-03-31

<書評>

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター、宇田川勝編  
『ケース・スタディー 日本の企業家群像』 文眞堂、2008年3月

長田貴仁

法政大学イノベーション・マネジメント研究センターは、1997年11月に企業家史研究会を発足し、企業家の「ケースブック 日本の企業家活動シリーズ」を刊行してきた。本書は、第1ケース集（『ケースブック 日本の企業家活動』有斐閣、1999年3月）、第2ケース集（『ケース・スタディー 日本の企業家史』文眞堂、2002年3月）、第3ケース集（『ケース・スタディー 戦後日本の企業家活動』文眞堂、2004年3月）に続く第4ケース集である。

同書の「はしがき」で、9名の執筆者を代表して、宇田川勝氏は次のように述べている。

第4ケース集の刊行によって、総計46テーマ・92名の企業家を登場させることができた。目標とした50テーマ・100名のケースには届かなかったが、この「日本の企業家活動シリーズ」のケース集が企図した、日本経営史上の主要なテーマをできるだけ多くカバーし、それを主導的に担った企業家活動のケースに光を当てるといふ、当初の目的はかなり実現できたと自負している。

たしかに、第1ケース集が刊行されて以来、この第4ケース集に至るまで、主要なテーマに即して2人の代表的な企業家を取り上げ、テーマとケースについて究明と解説するという編集スタイルを踏襲している。この本の最大の特徴は、読み易いという点である。学術書には簡単に書ける内容をわざわざ難解な表現で書かれているものが少なくない。この書籍は、研究者の良心を忘れない分析的記述を大切にしながらも、テーマでくくるといふ形式をとることにより、論点が明確になっていて分かり易い。その結果、企業家史研究の業績として価値ある内容でありながら、ビジネスマンにとっても親しみ易いケース集に仕上がっている。

ところで、「表現」に関する価値観は人々が属する「世間」によって異なる。

元一橋大学学長の故・阿部謹也氏は、学会という「世間」について次のように述べている。

研究者たちは誰に向かって論文や著書を書いているのだろうか。狭義には学会であ

ろうが、そのほかにそれぞれの著者の「世間」がある。一般的な文章は「世間」に向けて書かれるのである。その「世間」は著者を理解し、その文章が公刊されるたびに何らかの反応をする集団である。それは読者であると同時に、仲間であり、著者はその「世間」と暗黙の内に了解しあい、自分の行動のすべてについて「世間」の反応を期待している。<sup>1</sup>

研究者からはいろいろな意見が出てくることを承知でこの一文を引用した。では、経営史の研究者は、「表現」についてどのように考えているのだろうか。

2008年12月13日、企業家研究フォーラムの「2008年度冬季研究会」が法政大学市ヶ谷キャンパスで開催された。この研究会で、企業家研究の重鎮である由井常彦氏（三井文庫 常務理事・文庫長／文京学院大学大学院教授）が「私の企業家研究―実業家伝記と経営史研究―」というテーマで発表した。その中で、小説家が書いた伝記を取り上げ、経営史家との表現の違いについてこう語った。

「澁沢栄一を描いた幸田露伴は、最も偉大な歴史小説家です。その実証的で会話を一切使わない文体は、森鷗外のスタイルを踏襲しています。作家は、数字や統計は使いませんが、経営史家は、数字や統計はできるだけ使います。小説家とは相互補完関係にあるといえるでしょう」

小説の中でも「経済小説」は近年、映画化される作品も出るほど、新しい大衆文学として一ジャンルを確立しつつある。その先駆けとなった作家が『小説日本銀行』や『落日燃ゆ』などの作品で知られる故・城山三郎氏<sup>2</sup>である。それまで日本文学では、経済や企業に関する題材を正面から取り上げることはなかったが、同氏は商社マンの悲哀を描いた『輸出』で1957年に文学会新人賞を、59年に総会屋や企業乗っ取りをテーマにした『総会屋錦城』で直木賞を受賞した。城山作品の最大の特徴は、「経済活動における人の志」を描いている点である。そのような描写を用いて、経済や経営といったテーマに「人の血」を通わせた。

これらの作品を創作することができた城山氏の存在について、後輩作家である五木寛之氏は、鋭い視点で指摘している。

「城山三郎という作家は、いわば裏通りの司馬遼太郎のような存在と言っていいかもしれない。有名な財界人と対談したり、作品の題名が流行語になったりと、一見、はなやかな流行作家の印象があるが、その視角には、常に低く、地を這う感覚があった。」<sup>3</sup>

城山氏の作品だけでなく、文芸作品でありながら、資料収集と取材に多くの時間を費やすという点では、最近の「企業家」を主人公にした経済小説は、ますますノンフィクショ

<sup>1</sup> 阿部（2001）pp.5-6。

<sup>2</sup> 東京商科大学（現・一橋大学）卒業後、愛知学芸大学（現・愛知教育大学）で経済学者として教鞭を執りながら小説を書き始めた。2007年3月22日に死去。享年79歳。

<sup>3</sup> 五木（2007）p.27。

ンに近づきつつある。

『青年社長』の著者である作家・高杉良氏の自宅を訪れ、同氏から直接聞いた話である。

「ワタミの渡邊美樹社長と飲みながら話をしていた時のことです。『あなたをモデルにして小説を書きたいのですが』と提案したところ、彼は自分の日記を見せてくれたのです。それで、迫力ある小説を書くことができました。」

誰もアクセスできなかった渡邊社長の日記を入手したことで小説は書けたのだが、高杉氏は、インタビューや周辺取材を重ね、ビジネスの躍動感がより強く感じられる小説に仕上げた。

なお、この小説は実名で書かれている。研究者が作成するケースでは、インタビュー相手、調査を受け入れてくれた会社関係者との信頼関係を保つために、社名さえ伏せることが少なくないが、逆に、高杉氏は渡邊社長と信頼関係を築くことで、「事実」に近い小説を書くことができたのである。

本書に書かれた「補佐役の企業家活動」盛田昭夫の参考文献である江波戸哲夫氏の『小説 盛田昭夫学校』（上・下）も実名入りの小説である。この作品を読むと、映画の一シーンを見ているような気になってくる。硬い文章で書かれた文献を読むよりは、ソニーの創業者であり、偉大なる国際ビジネスマンであった盛田氏の実像に迫っていると言えよう。

江波戸氏は、小説家の取材手法について、こう話している。

「私は、徹底的に文献をレビューした上で、ジャーナリストが聞かないような些細なことまで関係者に聞きます。たとえば、盛田さんが応接室のソファに座ったシーンを描こうとすれば、どの位置に座ったかまで質問します」

主人公をはじめとする登場人物を実名で表記した物語は「小説」と呼べるのかどうかといった議論はある。実際、『小説 盛田昭夫学校』を担当した編集者には、「なぜ、これが小説なのですか」と複数の読者から問い合わせがあった。言い換えれば、実名小説は、実名を出すだけに、世の中に伝わっている以上に豊富なエピソードが盛り込まれており、巧みな文芸描写により、ストーリーを脳裏に焼き付ける効果を発揮している。

一方、小説家と同様、歴史家とは似て非なるものであるとされているジャーナリストの取材はいかなるものか。高品質な報道に携わるハイエンドなジャーナリストは、「テリア・モデル」<sup>4</sup>に類型される人が多く、調査ジャーナリズム（調査報道）という形式をとっている。この方法では、文献を重視しており、インタビューにより裏づけを行い、新たな発見を目的としている。つまり、歴史家の方法論に類似していると言えよう。

その「納得性」と「信頼性」は比較的高いと言える。ただし、情報が高品質か低品質か

---

4 アメリカのメディア評論家、デービッド・バーサミアンが、権力側の脚本をそのまま書き続けるジャーナリストを「プードル犬」にたとえたことから生まれた。一方、大衆の利益を守る立場で不正や汚職、社会悪に噛みついたり怒ったりして疲れを知らないテリア犬のようなジャーナリストは「テリア・モデル」と呼ばれるようになった。

を見極める能力、つまり、メディア・リテラシーを備えた読者や視聴者であれば、ハイエンドなジャーナリストが発信する記事や論説でさえ、鵜呑みにしてはならないと考えるだろう。それは、ジャーナリズムを研究している社会学者が言うところの、大衆に争点を投げかける「話題設定機能」の役割を果たしているからだ。ここが、研究者が書く論文やケースと大きく異なる点である。研究者にとっては、何が正しいか、何が誤りか、を自ら明らかにすることが最も重要な命題である。そのような議論に参加できる人は、専門を知る人でしかない。対してジャーナリストは、門外漢にも分かる表現で情報を提供し、多くの人に議論に加わってもらおうとしている。ある方向に導く「誘導性」の大小はあれ、読者に考える余裕を与えているということだ。

マスコミの報道や論説は、ときどき、誤報、誤認識はあるものの、それでも、数十万から数千万の読者や視聴者が「ほとんどまちがいない事実」として読み、見聞きしている。それだけに、メディア・リテラシーが読者、視聴者に求められる。

アカデミック・ケースを作成するときも、経済新聞やビジネス誌の情報を引用している場合が少なくない。つまり、ジャーナリズムの「信頼性」に依拠していることになる。それを資料とする場合、アカデミック・ケースの筆者は、記事や著書を書いたジャーナリストがどのような人物であるかを知り、そこで書かれている内容は、本当に事実であると確認したのだろうか。まず、学生であれば確認できていない確率は非常に高い。もし、データにしたビジネス・ジャーナリズムの情報が信頼性を欠いていたとすれば、アカデミック・ケースも改良の余地がある。もし、より100%に近い納得性と信頼性を確保するには、できるだけ時間をかけ、すべてのデータを自ら収集しインタビューを行い、そのデータと発言を正しくケースに反映しなければならない。「信頼性」を高めるためには、ハイエンドなジャーナリストの方法論が役立つのではないだろうか。

この書籍の参考文献にも、小説家やジャーナリストが書いた作品が少なくない。近年の企業家のケースになるほど、その比率は高い。小説は「つくりばなし」と分かった上で読者は読んでいるが、ジャーナリストが書いた記事、作品は「事実」が前提にある。では、事実とはどのように記述すべきなのだろうか。

伊丹・西野(2004)は、事実が人の頭の中にイメージを浮かばせ、そのイメージが人の思考をドライブする、という現象を「事実のイメージ性」と呼んでいる。そして、その効用について次のように述べている。

アリストテレスの言葉に、「人はイメージなしにはものを考えることができない」という言葉があるそうである。あれがこうなる、これがこうなる、とものを考えるとき、人は頭の中に具体的なイメージをもつものである。そのイメージがないと、抽象的な言葉だけでは頭が空回りしてしまうのが、われわれ凡人なのである。

このイメージ性は、多くの人と一緒に議論する場合にはとくに大切になる。ケースの事実が、議論の参加者に共通のイメージを具体的に抱かせるから、議論の共通の土俵が生まれるのである。<sup>5</sup>

---

<sup>5</sup> 伊丹・西野(2004) p.5。

この指摘はケース・ディスカッションに使われるときのケースについても述べられている。本書もケース・ディスカッションにも使える良いケース集である。ジャーナリストが書いた作品の中には、数字や統計も使いながら「事実のイメージ性」を尊重しながら描かれているものが少なくない。本書は「研究者の文章」で書かれており、編集もいわゆる「学術書スタイル」に基づいているが、一旦読みだすとすいすいと読み進むことができるのはなぜか。「事実のイメージ性」が底流に流れているのではないかと思われる。「事実には100%忠実に」という企業家史、経営史の鉄則を守りつつ、「読ませるケース」を書くにはどのように表現すべきかを考える上で参考になる一冊である。

## 参考文献

- 阿部謹也(2001)『学問と「世間」』岩波書店。  
江波戸哲夫(2005)『小説 盛田昭夫学校(上・下)』プレジデント社。  
伊丹敬之・西野和美編著(2004)『ケースブック 経営戦略の論理』日本経済新聞社。  
五木寛之(2007)「ある時代の終わり 城山三郎さんを悼む」『朝日新聞』3月27日朝刊、朝日新聞社。  
門奈直樹(2001)『ジャーナリズムの科学』有斐閣。

長田貴仁 (おさだ・たかひと)  
神戸大学大学院経営学研究科准教授